

カナダ文学の諸相

渡 辺 昇



開文社出版

カナダ文学の諸相

江苏工业学院图书馆
藏书章

渡辺 昇 (わたなべ・のぼる)

1934年カナダ・ヴァンクーヴァー市に生まれる。61年同志社大学大学院文学研究科(英米文学専攻)修士課程修了, 現在阪南大学教授。1987年度ブリティッシュ・コロンビア大学客員研究員。

(著 書)

『ミルトンと聖書』(開文社出版)

(共著書)

『現代英語文学の展望』(音羽書房)

『日本とカナダの比較文学的研究』(文芸広場社)

『ミルトン——詩と思想』(山口書店)

(訳 書)

C. トマス『カナダ英語文学史』(三友社)

(共訳書)

A. モンタギュー『アメリカン・ウェイ・オブ・ライフ』(山口書店)

カナダ文学の諸相

阪南大学叢書 35

1991年3月1日 初版発行

著 者	渡 辺 昇
発 行 者	寒 竹 彦 文
印 刷 所	平 河 工 業 社
製 本 所	株式会社千代田製本工場

郵便番号 160 東京都新宿区坂町26

発行所 開文社出版株式会社

電話 (3358) 6288 番・振替 東京 6-52864 番

ISBN-87571-915-9 C3082

目 次

第1編	カナダにおける自国文学評価の変遷	1
第2編	E. ポーリン・ジョンソン論 ——あるカナダ・インディアン詩人の場合——	29
第3編	エミリー・カー『クリー・ウィク』 ——クイーン・シャーロット諸島との関わり において——	63
第4編	カナダ文学における世代意識 ——ヒュー・マクレナン『気圧計上昇』の場 合——	95
第5編	1960年以降のカナダ文学 ——マーガレット・ロレンス『石の天使』の 場合——	123
第6編	若き魂の苦闘 ——山本有三とモーディカイ・リッチラーの	

教養小説——	159
第7編 カナダにおけるフェミニズム文学	
——マーガレット・アトウッド『浮上』を中	
心に——	183
あとがき	205
主要参考文献	211
索引	240

第1編 カナダにおける 自国文学評価の変遷

I

カナダ建国百周年の2年前、1965年に大部な『カナダ文学史』*Literary History of Canada*が発刊された。ウェスタン・オンタリオ大学教授で、カナダの中心的な批評家の一人でもあるカール F. クリンク Carl F. Klinck (1908～) を編集主幹として30余名にのぼる研究者を配置し、16世紀の開拓時代から1960年代初頭までのカナダ文学全体を網羅して俯瞰した本書は、まさにこの分野における画期的な業績であった。

そして本書のもつ意義は、単に過去のカナダ文学を総括しただけではなく、それに一定の評価を与え、来たるべき発展の時代への指針をも提示したことにある。

1960年以降、カナダ文学の作家・作品が急増し、同時にその質に対する評価も一般に高まっている。上述書の第2版が1976年に発行されたとき、当初1冊本であったものが3冊本とされ、その3巻目が1960年～1973年の業績に当てられた一事をみても、カナダ文学の発展の速度が推定される。1984年までの業績を収めた第4巻もごく最近世に聞われている。

このようなカナダ文学の向上的展開に伴って、近年、その評価に対する論議が提起されるに至っている。後述する J. メトカー

フの伝統・古典批判がその代表的なものである。

本論においては、現代のこのような論議の背景を明らかにする一助として、カナダにおける自国文学評価の変遷を、歴史的にたどってみたいと思う。

なお論述に当たって、批評史の概略の流れに関しては一部 D. ベニット Donna Bennett の「英系文学批評」“Criticism in English”¹⁾を参考とし、用いた資料は、可能なかぎり、何らかの形の原資料の範囲にとどめたことを、あらかじめ断っておきたい。

II

カナダにおける文学批評の萌芽は、すでに19世紀中葉に見出だすことができるが、それは主として詩に関するもの、それも一般にアンソロジーの序文という形をとっている。批評書がこの国において単行本の体裁をもって現れるのは、ようやく1920年代に入ってからのことである。

この国における最初の詩のアンソロジー『カナダ詩人選集』*Selections from Canadian Poets* は1864年に、アイルランド生れのメソジスト派牧師 E.H. ダワート Edward Hartley Dewart (1828～1903) によって編まれた。彼は18年間にわたりカナダ東海岸の各地に赴任しつつ詩を収集し続けたのであるが、その国において前例をもたぬこの試みには、多大な労力を要したであろうことは容易に推察できる。またこの最初の詩集の刊行がカナダ連邦結成を目前にした時期に、強いナショナリズムへの衝動に触発されてなされたことも興味深い。

その序文においてダワートは言う。

一国の文学はその国の性格形成に不可欠の要素である。それは単に一国の精神面における進歩の記録であるに止まらず、その知的生活の表現、国家統一の絆、国民的エネルギーを導く指針²⁾でもある。

わが国が植民地であることは、いかなる政治的利点があるにしても、土着の文学の成長にとっては好ましいものではない³⁾。

英国、米国の文化を優位とする当時の一般的風潮に抗して、彼があえて自国文学を擁護する立場をとったことは間違いないが、間接的にしろ、その未成熟さを次のように肯定せざるを得なかったことも事実である。

わが国の詩の性格を評するに当って、最も偏狭な批評家であれば、粗雑で不完全なことがおしなべてその特徴であると認めざるを得ないだろう。このことは、新しい国にありがちな教育条件の不備によるものといえ、ある程度は説明できる⁴⁾。

ダワートがこのアンソロジーに収めた詩人の中で最も推奨するのは C. サングスター Charles Sangster (1822~93) であるが、その理由も含めて彼は以下のように述べている。

読者層に最も果敢に訴えかけ、カナダ詩を豊かなものとするのに最も功績のあった詩人たちの中でも、その筆頭にくるべきはチャールズ・サングスターである。その作品の豊富さと広範さ、披瀝された独創性と描写力、力強く品位をもって書かれた

カナダの主題の多様さ、自然美への情熱的共感、詩に発言の場を見出だした忠誠・勇武の愛国心、これらは従来にも増して同国人の敬意を求めるに十分な正当性をもつものである。⁵⁾

前述したように、カナダ連邦結成を控えた時期の特性として「愛国心」を前面に出したのは特徴的といえるが、それにも増して「カナダの主題」や「自然美」といった、この国の特性を詠うことを文学評価の基準に据えたことは、時代に先がけたアイデンティティ模索の芽生えとして注目に値しよう。

なおダワートがこの序文において評価する十余名の詩人のうちで、現代の各種のアンソロジーに比較적よく名を連ねるものは、サングスターの外、A. マクロラン Alexander McLachlan (1818~96), C. ヘヴィセッジ Charles Heavysege (1816~76), S. ムーディー Susanna Moodie (1803~85) の3名のみに過ぎない。

このアンソロジーから、連邦結成を経て丁度25年後の1889年に、カナダ・ハミルトン生まれの小説家・詩人で、後にウェストマウント市長、カナダ学士院長ともなる W.D. ライトホール William Douw Lighthall (1857~1954) によって『自治領カナダの詩歌』*Songs of the Great Dominion* が著された。この表題と共に、その副題「カナダの森と湖川、開拓地と町よりの声」*'Voices from the Forests and Waters, the Settlements and Cities of Canada'* が示すように、このアンソロジーは新しく生まれた国家を言祝ぐものであり、編者による序文にも自国文学への賛美と期待が溢れている。

ダワートの選んだ詩とそれ以後の詩との最も顕著な相違点は、連邦結成以来の詩人たちが身につけている大いなる喜びと確信の響きにある。建国に至るまでの詩歌は弁解がましく、意気のあがらぬものだったからである。今ではあらゆるものが希望を指し示している。詩に一層の確信が生じたというだけでなく、遥かに質が向上しているのだ。米国の雑誌に掲載された最良の詩の多くも、カナダにおいて書かれているのである。⁶⁾

確かにこの詩集には、C. メア Charles Mair (1838～1927), I.V. クローフォード Isabella Valancy Crawford (1850～87), C.G.D. ロバーツ Charles G.D. Roberts (1860～1943), A. ランプマン Archibald Lampman (1861～99), B. カーマン Bliss Carman (1861～1929), E.P. ジョンスン E. Pauline Johnson (1862～1913), D.C. スコット Duncan Campbell Scott (1862～1947) 等、カナダ文学史に欠かすことの出来ない詩人たちが名を連ねている。にもかかわらず、その第2章が「新しい国民感情」‘The New Nationality’ となされているように、この詩集自体にいくぶん国民精神の高揚を目的とする意図が感じられ、それゆえ文学的評価にも多少の誇張のあることも否めない。

収録された詩人の一人で、オンタリオ州において郵便局員としての生活を送るかたわら、孤独のうちに詩作を続けていたランプマンも、当時の変化の兆しを敏感にとらえ、1891年にオタワで行った講演「二人のカナダ詩人」‘Two Canadian Poets’ の中で次のように述べている。

この20年間に、わが国においては大いに進歩の跡がみられ、祖

国に対する情熱をカナダに感じはじめている人たちに、希望と慰めとなる多くの事柄が成し遂げられてきました。私たちの中にはすでに、父や祖父がこの地に生きて死んだ者、イギリス人でもフランス人でもドイツ人でもなく、純粹にカナダ人である者が多くいます⁷⁾。

今から約10年前、私がとても若く、まだ大学生だった時のことです。5月のある日の夕方、その頃に出版されたばかりの『オリオンとその他の詩』*Orion and Other Poems* を、ある人が私に貸してくれました。これまで私は周囲の大部分の若い仲間たちと同様、自分たちが美術も文学も存在し得ない文明の疎外地に希望もないまま放置されており、仲間の誰かがなにか偉大な仕事をやる可能性があると考えるのは無駄なことであり、それを自分らの力でやり得ると期待するのは更に無駄なことだ、という気のめいるような確信を抱いていました。私は狂おしい興奮にとらえられて徹夜で幾度も『オリオン』を読み返し、床に就いたときも眠れませんでした。そのような作品がカナダ人によって、若者によって、私たちの一人によって書かれ得るということは、私には素晴らしいことに思えました。それは私たちに大いに活動せよと呼びかける、どこか新しい芸術の樂園から響く声のように聞こえました⁸⁾。

このようにカナダにおける変化やロバーツの詩集(1880)に触発され、そこに一脈の光明を見出だしたランプマンではあったが、当時の自国文学が置かれた一般的状況に対しては、あくまでも冷静な評価を下していた。以下は、同じ講演で彼が述べた言葉であ

る。

最近カナダ文学について語られることが多くなりましたが、そのほとんどの場合に、カナダ文学は存在するのか、という問いとそれに対する答えという形がとられています。勿論、まだカナダ文学というものには存在していません。最も厳しい基準で判定された場合でも十分な卓越性をもち、カナダ文学と呼び得るほどに十分な地方色を特徴として備えた作品群を私たちが提示できるまでには、恐らく完全に1世代か2世代はかかるでしょう。独自性のあるアメリカ文学らしきものを合衆国が生み出したのは、ここ四半世紀以内のことに過ぎません。ロングフェロー Longfellow [1807~82] やホーソーン Hawthorne [1804~64] の時代の作品には、明確にアメリカ的と呼べる文学的特性はほとんどなかったのです。⁹⁾

Ⅲ

20世紀初頭に至っても、カナダ文学に対する前章の評価はほとんど変わっていない。トロントのライアソン出版社 the Ryerson Press の編集主任・文芸顧問として多くの有望な作家を世に送り、文学功労賞を設置し、カナダ学士院にも選任されたローン・ピアス Lorne Pierce (1890~1961) は、1923年発行のアンソロジー『我がカナダ文学』*Our Canadian Literature* の「散文部門」への序文において言う。

カナダは最も品位ある伝統を持ちながら、依然として水のよ

うに無色のままでいたかもしれない。だが連邦結成とともにカナダ自治領が誕生したとき、同時にカナダ魂が出現した。その時以来、わが国の文学は独自の形状を呈したのである。自己統治をなす国家はおのずと独自の考え方を会得し、その思想を明確にする必要がある。この方法によってのみ、その国民のもつ精神的理想を近隣の国々に熟知させ、その理想に基づいて自らの市民を教育するよう望み得るからである。今までのところ、わが国には他を圧するほどの名作も不変の伝統も存在しない。カナダはあまりにも伝統作りに忙しく、自らを知ること、また自国から必然的に生まれるべき芸術的技巧でもって国家の理想主義を装うことに、深く関わりすぎているのだ。¹⁰⁾

アイデンティティの確立は現代においてもカナダ文学の抱え続けている課題ではあるが、20年代に文学育成に携わったピアスにとってはその重みは更に大きく、上記の論調には政治的独立に基づく自信と同時に、歴史の浅さから文学を含む思想的・文化的側面の発展・確立が遅れていることに対する焦燥すら感じられる。

このアンソロジーに収録されているのは「韻文部門」で74名だが、特記すべき詩人は、ライトホールがすでに選んでいたものの他には、新しく E.J. プラット E.J. Pratt (1882~1964) の名を見るにすぎない。「散文部門」では59名のうち現代においても比較的著名な作家は15名、そのうち当時すでに故人であった A.M. ジェイムスン Anna Murphy Jameson (1794~1860), J. リチャードスン John Richardson (1796~1852), T.C. ハリバートン Thomas Chandler Haliburton (1796~1865), C.P. トレイル Catharine Parr Traill (1802~99), S. ムーディー (既出)

等の10名を除けば、C.W. ゴードン Charles W. Gordon(1860～1937, 筆名 Ralph Connor), E.T. シートン Ernest Thompson Seton (1860～1946), S. リーコック Stephen Leacock (1869～1944), F.P. グローヴ Frederick Philip Grove (1872～1948), L.M. モンゴメリー Lucy Maud Montgomery (1874～1942)の5名である。すでに大家はほの見えてもその数は少なく、その時代の文学に対するピアスの概観的な評価には確かさが認められる。

カナダ文学の置かれたこのような状況に発展の方向性を見出し、その独自性確立の方策を探る試みも、当然この時期にはなされつつあった。スコットランド生まれの英文学者で、アメリカの幾つかの大学の教授を歴任した L. スティーヴンスン Lionel Stevenson は1926年、彼が24歳のときに著した『カナダ文学の評価』*Appraisals of Canadian Literature* において次のように述べている。

三百年にわたるカナダの歴史を通じて、古来の広大な山地、湖、平原を感動的に表現した例はほとんどない。ヨーロッパの国々を併合したに等しい広漠たる地域は今だ未踏のままである。住民たちは、彼らの存在にまだ気づいていない一匹の怪物の上に、不安定な状態で乗せられているように見え、もし絶えず足場を保持しようとする努力を止めるようなことがあれば、その俄か造りの街や散在する耕作地は、出現した時の速度以上の早さで消滅してしまうだろう。子供の時から自然のこの広大さと潜在力に囲繞されているため、カナダ人は文化的伝統に基づいた教育を受けはじめるよりも遥か以前から、その存在に気づいてい

る。カナダ人の自然に対する共感はほとんど生来の特性とも言えるものであるが故に、古き大地とそれに対する人類の関係の解釈として一定の意味を保持している、あの宗教・神話・哲学の特性に、彼らは本能的に感応するのである¹¹⁾…。

自然への共感に前述のダワートも重視したところであるが、これを更にカナダ文化存続・発展の本質的要素、カナダ人の生来の特性として位置づけ、この表現の成否に自国文学評価の基準の一つを置こうとしたところに、スティーヴンソンの論説の意味がある。またカナダの大地と神話とを結合する発想は、後述の N. フライのその先駆としても興味深いところである。

人口が稀薄であることから生ずる読者層の薄さ、また自国文学そのものに対する一般大衆の関心の低さは、従来からカナダの作家たちが創作活動を発展的に継続する上での隘路となっていた。この点に関して、マニトバ大学およびコーネル大学の英文学部長、シカゴ大学英文学教授を歴任し、1943年に影響力をもった批評書『カナダ詩論』*On Canadian Poetry* を著した E.K. ブラウン E. K. Brown (1905～51) は、その著書において下記のように論じている。

真面目なカナダの作家は、うまく生計を立てながら文学を追究し続けるために、三つの方策のうちの一つを選ぶことになる。その一つは他国への移住であり、ブリス・カーマンがこの解決方法を選び、多くのものがその例に習っている。第二は文学とは無関係な仕事に従事することによって生計を立てるもので、アーチボールド・ランブマンはこのやり方で問題を解決し、ま

た一般の作家たちの間でもこの方法が選ばれている。第三はカナダに居住し続けながら、少なくとも経済的な面で他の国や文明に依存するというもので、モーリー・キャラハン Morley Callaghan [1903~90] 氏はこの解決策をとった。しかしこれら¹²⁾の解決策のいずれも危険と異議をまねがれ得ないものである。

私が提起したいのは、カナダにおいて叙情詩が豊富である半面、長くて複雑な作品、すなわち叙事詩や詩劇が乏しいのは、カナダ人が創作活動に最も適した時期のほとんどを作家以外の生業に従事して過ごす必要があるという事実に関係している、という問題である。彼らのうちの幾人かは、同様に詩人でありながら非文学的な職業の犠牲となったマシュー・アーノルド Matthew Arnold [1822~88] のように、主要な詩の創作企画を完¹³⁾遂できぬままでのだ。

20世紀半ばにしてなお経済的問題に災いされていた当時の文壇の状況を理解しつつも、それが原因するカナダ詩の跛行的な展開を批判的に評価せざるを得なかったブラウンの心境には、複雑なものがあつたであろう。

IV

ヨーロッパにおいて20世紀前半は、前世紀に始まったモダニズムの謳歌された時代といえるが、英文学、特に詩の場合は T.S. エリオット T.S. Eliot (1888~1965) らの強い影響下にあった。

モダニズム Modernism は芸術全般の国際的運動に関わる極め

て包括的な用語であるが、文学に関するモダニズムとしては『文芸用語辞典』*A Dictionary of Literary Terms* に次の定義がある。

文学に関するかぎり、モダニズムとは既成の規則、伝統やしきたりから離脱し、宇宙における人類の位置と役割を新鮮な目で見つめ、表現形式や文体において多くの（場合によっては注目すべき）実験¹⁴⁾を行うことを表わす。

この運動はヨーロッパ文化圏とのつながりの強いカナダ文学界にも当然、影響を及ぼしており、1936年には W.E. コリン W.E. Collin (1893～1984) による最初のモダニズム批評書『白きサヴァンナ』*The White Savannahs* が発行されているが、カナダ文学の「伝統」と関わって際だった論争を引き起こしたのは、ミシガン州立大学の英文学教授で詩人でもあった A.J.M. スミス A.J. M. Smith (1902～80) の『カナダ詩集』*The Book of Canadian Poetry* (1943) であった。スミスはその序文において、カナダ詩を「自国主義的」'native' なものと「世界主義的」'cosmopolitan' なものに大別した上で、後者に重きをおいて論じたのであるが、これに対し反論を加えたのが J. サザーランド John Sutherland (1919～56) である。『ファースト・ステイトメント』*First Statement* 誌を通じてカナダ文壇に一定の発言力を有していた詩人サザーランドは、1947年に編んだ『その他のカナダ人』*Other Canadians* と題するアンソロジーへの序文において言う。

スミス氏の論に従えば、カナダ詩は従来2つの流派、すなわち自国主義的流派と世界主義的流派の所産であり、「前者は何で